

OCOJ に基づく 古日本語の母音連鎖の分析

An Analysis of Vowel Sequences in Old Japanese Based on OCOJ

吉波 弘

Hiroshi YOSHIBA

1. はじめに

本稿は、検証可能な最古の日本語における母音連鎖の分布を観察し、その特徴を記述することを主たる目的としている。ここで主に使用する資料は The Oxford Corpus of Old Japanese (以下、OCOJ) に含まれる『万葉集』と『仏足石歌』(『仏足跡歌』とも書く) である。また、分析に使用する理論的枠組みは 1960 年代以降発展を遂げた生成音韻論であり、そのために、従来から言語学、文献学、国語学の各分野間に存在する表現方法の違いや、日本語での表現と英語での表現の整合性などを再検討しながら論旨を展開する必要がある、それが本稿の副次的な目的でもある。

1.1 日本語の歴史区分と名称について

先ず、本稿の表題にも使用している「古日本語」という名称についてであるが、日本人研究者が一般的に用いる日本語の歴史区分とその名称は以下の通りである。

(1) 日本語の名称と時代区分

- a. 上代 (または古代) 日本語：奈良時代 (8 世紀)
- b. 中古日本語：平安時代 (9 ～ 12 世紀)
- c. 中世日本語：鎌倉・室町時代 (12 ～ 15 世紀)
- d. 近世日本語：戦国・江戸時代 (16 ～ 18 世紀)
- e. 近代日本語：明治～ (19 世紀～現在)

これに加えて、あえて現在の日本語を区別して扱うなら、「f. 現代日本語：昭和 (戦後)・平成」となろう。さらに、「日本祖語」にまで遡って研究する学者によっては飛鳥・奈良時代以前の日本語に「那馬台語」、「縄文語」、「弥生語」などの名称を当てはめることもある。また、国語学的視点を踏まえて、各名称から「日本」を除き、「上代語、古中語…」と呼ぶことも多い。いずれにしても、この種の時代区分について研究者の多くは大まかな便宜上の区分と解釈しており、具体的な資料に基づく実証を踏まえた言語学的区分とは言い難い。しか

し、そのような中において、唯一多くの研究者が認める区分が橋本（1938）による音韻史的観点から三期に分ける方法である。

(2) 音韻特徴による時代区分

- a. 第一期：奈良時代（及びそれ以前）
- b. 第二期：平安時代～安土桃山時代
- c. 第三期：江戸時代～現代

この区分の基準になる音韻の特徴についての詳しい説明は原書に委ねるが、名称としては、これら三期を「古代（又は上代）（日本）語、中世（日本）語、近代（日本）語」と称するのが最近の傾向のようである。

一方、英語圏の研究者による時代区分と名称の一例として、OCOJ のプロジェクトを率いるオックスフォード大学東洋研究学部のフレスヴィック教授は、(2) の三分割案に修正を加えて四分割を提案している。

(3) Frellesvig (2010) による時代区分と名称

- a. Old Japanese (略 OJ) 700-800 年
- b. Early Middle Japanese (略 EMJ) 800-1200 年
- c. Late Middle Japanese (略 LMJ) 1200-1600 年
- d. Modern Japanese (略 NJ) 1600 年以降

(3) において中世日本語を二分割した理由は、平安中期を挟んでその前後での文法及び音韻上の変化が顕著であるためである。そして、日本祖語を表す場合には pJ (= proto-Japanese) を、また古墳時代から飛鳥時代の日本語を示す名称として pOJ (= pre-Old Japanese) を用いることもある。

上記の考察、特に言語学的及び国際的であるという視点と簡潔であることを踏まえて、著者は日本語文献の分析に必要な最小限の時代区分を 4 種類とし、英語及び日本語の名称を次のように設定する。

(4) 4 つの区分と英日本語の名称

- a. OJ = 古日本語
- b. EMJ = 中古日本語
- c. MJ (又は LMJ) = 中日本語
- d. NJ = 近日本語

尚、現代日本語を区別する場合は、(4) に「e. CJ (= Current Japanese) = 現日本語」を加える。ただし、本稿で主として扱うのは古日本語である。

1.2 OCOJ における表記法について

Frellesvig (2015) は、言語研究のために作成する日本語コーパスには仮名文字表記では

なく、音素表記を使用すべきであると主張している。海外で言語学研究に携わったことがある者にとって、この主張は一見奇異に聞こえる。なぜならば、あらゆる人間言語の研究において、特に音韻・音声の研究においては、言語資料を分節（segment）に分割して表記すること、さらには素性（feature）を使って表記することは当然であり、それなしには研究ができないことを皆が承知している。しかしながら、国内で出版される日本語の研究書には、今だに仮名表記による資料を使用した論文が多数見られる。例えば、近藤（2015）においても Frellesvig と Horn&Russell 以外の論稿にはすべて仮名表記又は漢字仮名混合表記の資料のみが使われている。勿論、統語や意味研究において unnecessary 場合もあるだろうが、国際的に通用するコーパスであるためにはアルファベット（又は IPA）を使った音素表記が望ましいし、たとえ国内用であっても形態構造以下の分析にはそれが不可欠である。従って、OCOJ では各文献を万葉仮名表記による原文、漢字カナ混合表記による読み・解釈、そしてアルファベットによる音素表記（又は “romanization”）の 3 通りで入力している。

1.3 OCOJ に含まれる文献

オックスフォード大学日本語研究所が作成したコーパスには、所謂「上代記紀歌謡」と呼ばれる奈良時代を中心に作成された文献の内、次の 8 典が含まれている。

- (5) a. *Bussokuseki-ka* (略 BK、仏足石歌 753 年)
- b. *Fudoki kayō* (略 FK、風土記歌謡 730 年代)
- c. *Jōgū Shōtoku hōō teisetsu* (略 JSHT、上宮聖徳法王帝説 年不詳)
- d. *Kojiki kayō* (略 KK、古事記歌謡 712 年)
- e. *Man'yōshū* (略 MYS、万葉集 629 ~ 759 年)
- f. *Nihon shoki kayō* (略 NSK、日本書紀歌謡 720 年)
- g. *Shoku nihongi kayō* (略 SNK、続日本紀歌謡 797 年)
- h. *Shoku nihongi senmyō* (略 SNS、続日本紀宣命 797 年)

上記以外に、少し年代が下った文献としてはもう 1 典 *Engishiki norito*（延喜式祝詞 927 年）も含まれている。OCOJ の内、本稿で使用する主な資料は *Bussokuseki-ka* と *Man'yōshū* の 2 典である。尚、このコーパス全体の詳しい記述形式・構造については Horn&Russell (2015) を参照されたい。

2. 万葉仮名による表記とその音価について

日本語を表す最も古い体系的な表記法として広く知られている万葉仮名については橋本 (1917) がその基本的内容を明らかにしている。橋本によれば、この文字体系の本格的な研

究は江戸時代の医学者である本居宣長とその弟子の石塚龍磨によって行われた。特に後者の著書『仮名遣奥山路』が有名であるが、それ以前にも契沖や奥村栄実などの研究が先鞭をつけたとのことである。『万葉集』を始め多くの記紀歌謡に使われている万葉仮名は、形の上では漢字であるが、中国語、所謂漢文ではなく、日本語を表す目的で使われている。日本語の音を漢字の音読み（つまり中国語の発音）に合わせて使用する用法が主であるが、『万葉集』では漢字を表音文字としてだけではなく、表意文字としても使用しているし、時として作者の機智を反映した判じ絵的表記も含まれている。また、記紀歌謡の中でも使用する度合いに差異があり、『日本書紀』などでは万葉仮名ではなく漢文体が主体となっている。

さて、万葉仮名について長年にわたり研究者の間で注目されているのが、古日本語の母音、特に*i e o*の3母音を表記する漢字が二組に分かれている事実に基づき、古日本語の母音体系を8母音型とする説である。石塚（1798）から橋本（1917）を経て、多くの議論を重ねて来た「上代特殊仮名遣」による甲類母音と乙類母音の書き分けであるが、その音価については未だに定説は無いと言ってよい。この問題の解決には、日本語系統論、方言学、比較言語学など多くの分野にわたる包括的な研究が必要で、これまでのところ、残念ながら皆が納得する答えには到達していない。

2.1 OCOJの表記

では、この問題について OCOJ ではどのように処理しているのでしょうか。Frellesvig (2010) は Frellesvig&Whitman (2008) を踏まえて、大野 (1990)、Miller (1967)、Martin (1987) などにも言及しながら、古日本語の8母音の音素表記を次のように設定している。

(6) 8母音の音素表記

- a. /i/ 甲類・中和
- b. /wi/ 乙類
- c. /ye/ 甲類
- d. /e/ 乙類・中和
- e. /wo/ 甲類
- f. /o/ 乙類・中和
- g. /u/
- h. /a/

また、これらの音価については、Miyake (2003) に示された次の案を紹介している。

(7) Miyake による8母音の音価

- a. [i] < 甲類 /i/
- b. [ɨ] < 乙類 /i/
- c. [e] < 甲類 /e/

d. [əj] < 乙類 /e/

e. [o] < 甲類 /o/

f. [ə] < 乙類 /o/

g. [u] < /u/

h. [a] < /a/

そして、Frellesvig (2010) はこの案について、自分の考えに近い内容ではあるが、むしろ古日本語より古い段階の状況を表している、と述べている。つまり彼は、古日本語から中日本語を経て近日本語に至る過程で起こった母音の中和化が8世紀には既に始まっていることを示唆している。

以上の考察を踏まえて、本稿では(6)に基づいた音素表記法で古日本語の資料を記述・検討することになる。

3. 古日本語における母音連鎖の特徴

橋本(1942)は古日本語の音節構造について、母音音節は語頭にのみ分布し、語中及び語尾には現れないと主張しており、これは大半の研究者が認めるところであるとも述べている。もしこれが正しければ、古日本語において語中での母音連鎖は存在しないことになる。これがほぼ事実であることをOCOJを用いて検証することが本章の目的である。

3.1 OCOJ から抽出した母音連鎖

OCOJは全体で約11万語からなるコーパスであるが、全体を対象にして母音連鎖(VV)を検索した結果、得られたのは僅かに68例に止まった。内訳は(8)の通りである。

(8) 語中 VV の出現回数

a. MYS 56 回

b. KK 7 回

c. NSK 4 回

d. BS 1 回

この検索ではVyVとVwVは除外されているので、(6b)、(6c)、(6e)が語中で他の母音に隣接する回数は網羅できていないが、それを考慮に入れても、この結果は驚異的に低い数字である。この中で、MYSについてさらに精査してみると次のように分類ができる。

(9) MYS の語中母音連鎖の構造

a. [名詞 + 名詞] などの合成語 (9 例)

apumiagata 淡海縣「近江の地名?」7.1287、inausiro 伊奈字之呂「稻筵「敷く」

の枕詞」8.1520、karaawi 鶏冠草「韓藍」11.2784、karaus 可流羽須「韓白」16.3817、kurwousi 黒牛（乃海 紅丹穂經）「和歌山県海南市黒江付近」7.1218、sipotusugaura 塩津菅浦「滋賀県西浅井村塩津付近」9.1734、tubaiti 海石榴市「椿市」12.2951,3101、yutuiamura 湯都盤村「ゆつ（靈力）岩群」1.22

b. 反復語（3例）

asanaasana 朝々「朝な朝な」11.2502、iroironi 色々「色々」19.4245、
uturautura 宇都良々々々「うつらうつら」20.4449

c. 子音脱落により連鎖が生じた語（37例）

i. kaki > kai（8例）

kai 加伊「權」2.153（2回）／賀伊「權」10.2052、kainuki 加伊奴吉
「權貫き」17.3993、makai 眞可伊「眞權」8.1520,19.4187,19.4254
／末加伊 20.4331

ii. *kori > koi（9例）（参考：korokoro, korobi などは実在）

koimarobi 展轉「転び」3.475,10.2274,13.3326／反側 9.1740,1780、
koipusi 許伊布之「反倒し」17.3962／己伊布之「臥伏し」17.3969／
許伊臥 19.4214、koipusu 反側「こい伏す」12.2947

iii. kuyi > kui（3例）（参考：notinikuyutomo 後雖悔 3.410）

kui 悔「悔」4.674,11.2386、kuite 久伊豆「悔いて」18.4057

iv. miya > mia（1例）

miaraku 都宮「瑞殿」1.50（< miya + iraka?）

v. *oyi > oi（14例）（参考：oyosu「老い」の他動詞形）

oi 耆不為「老い」9.1740、oiduku 意伊豆久「老いづく」18.4220、oinami
老奈美「老並み」4.559、oinamu 将老「老いなむ」7.1349、oinikyeru
老尔来鴨「老いにける」12.2926、oinite 老尔豆「老いにて」5.897、oinu
雖老「老いぬ」11.2689,12.3043、oipito 老人「老人」6.1034,11.2582,16.3791,
18.4094a、oitaru 耆矣「老いたる」16.3885、oizita 老舌「老舌」4.764

vi. (moye >) moyi > moi（1例）

moitutu 毛伊都追「萌いつつ」18.4111

vii. uyeru > (*uyuru >) uuru（1例）

uuru 宇々流「植うる」15.3746

d. 原語の発音に由来する語（2例）

mukau 無可有「（莊子）虚無自然の世界」16.3851、kuu 功「功績」16.3858

e. その他（5例）

i. ou 飮 3.371／飮字 4.536「島根県意宇郡」

ii. maukezu 麻宇氣受「設けず」19.4125

iii. mause 麻宇勢「申せ」18.4061、mausitamapyere 麻宇之多麻敞礼「申し
給へれ」18.4094b

上記の分析において、先ず(9a,b)は語中連鎖というよりも基底構造では語境界を挟んだ母音連鎖であり、母音が語頭にある語が別の語の後ろに連結して生成された構造である。次に最も多く出現する例が(9c)であり、これらは子音の脱落により生じたものと考えられる。残りの5種類の語は頻度から見ても非常に特殊な例で、(9d)の2語は中国語、すなわち外来語としての特殊な発音、また、(9e.i)は唯一地名で使われている母音連鎖である。そして、最後の(9e.ii,iii)の動詞「設け」(下二)と「申し」(四段)の2語だけが、古日本語における真の語中母音連鎖を持つ語と言えるであろう。

3.2 現日本語との比較

次節に進む前に、ここで現代日本語における母音連鎖を確認しておこう。

(10) 現日本語における語中母音連鎖の例

a. ai: ai 愛／藍／会い、kai 貝／櫂／界／会／買い、mai 舞／枚／毎／米

b. ao: ao 青、kao 顔、sao 竿、aori 熨り、kaori 香り

c. au: au 会う、nau 絢う、ubau 奪う

d. ea: ea エア(コン)、hea ヘア(一)、rea レア(ステーキ)

e. ei: ei 英、mei 姪、rei 礼／霊

f. ie: ie 家、kie 帰依／消え(る)、tie 知恵、mie 見栄／見え(る)

g. io: io 庵／魚、mio 滌、sio 塩／潮

h. oa: oa オア(シス)、koa コア／コア(ラ)

i. oe: oe 終え(る)、koe 声／肥、hoe 咲え、soe 添え／沿え

j. oi: oi 甥／老／追い／負い、koi 恋／鯉／来い／濃い、toi 問／樋／土肥

k. ou: ou 追う／負う、kou 功／高／甲、sou 添う／沿う、tou 問う

l. ue: ue 上／飢／植え、kue 喰え／クエ、sue 末／据え、tue 杖

m. uo: uo 魚、kuo 食お(う)／クオ(リティー)、suou 吸おう／蘇芳／周防

(10)に見るように、和語(訓読み語)だけでなく、漢語(音読み語)や外来語(カタカナ語)を探せば、語中母音連鎖を含む現日本語の語は数え切れないほど存在する。

3.3 古日本語の音節構造

本章の冒頭でも述べたが、橋本を始め多くの研究者が認める「古日本語においては母音音節は語頭にのみ現れる」という主張が、3.1で示した万葉集の調査で改めて確認されたことになる。従って、別の表現を借りれば、「古日本語はほぼ完全なCV言語である」というこ

とができる。つまり、古日本語の語は語頭以外では全て CV という短い開音節の連続で構成されているということである。さらに、3.2 で例証した現日本語の音節構造と比較すると、前者から後者に至る間に (9a,b,c) で見たような歴史的な音韻過程が起こり、日本語の音節構造が変化したことを物語っている。例えば、子音脱落の例として広く知られている平安中期の『源氏物語』などに見られる *suigai* (< *sukigaki*, 透垣) のような例は、この歴史的推移の途中経過を示すものと言える。

4. 語境母音連鎖と母音消去

前章では語中母音連鎖に焦点を当てて論じたが、第4章では連続する二つの単語の語境で起こる母音連鎖（本稿では語境母音連鎖と呼ぶ）について検討する。まず、MYS において母音で始まる語を検索した結果、頻度にして約 20,900 回使用されている。その内、句の始めにあるのが約 4,900 回なので、詠唱又は音読の際の語境連鎖は約 16,000 回と考えられる。語中の母音連鎖が厳しく制約される古日本語において、これほど多くの語境連鎖があることに驚くと同時に、当時の口語においてどのように発音されたが興味深い。そして、本章ではその答えを求めて、古日本語の母音脱落、すなわち語境界で母音が連続する時に二つの母音の一方が消去される現象について MYS と BS の例を見ながら考察をする。

4.1 母音脱落の構造

橋本（1949）は古日本語に見られる語境界での母音脱落について、三種類の形があることを説明している。

(11) 母音脱落の種類

- a. 母音で始まる語が他の語に後続し、複合語又は連語を作る時、後ろの語の語頭の母音が脱落する。

例：kataomohi > katamohi 「片思」、hanareiso > hanareso 「離石」

- b. a とほぼ同じ環境で、前の語の語尾の母音が脱落する。

例：araiso > ariso 「荒磯」、kuniuti > kunuti 「国内」

- c. 古代歌謡の字余り句の多くは、母音連鎖を含み、発音上は片方の母音が脱落する。

6 → 5 文字の例：tosinoutini > tosinutini 「年の内に」、

tukiyaaramu > tukiaramu 「月やあらむ」

7 → 5 文字の例：samoarabaare > samarabare 「さもあらばあれ」

さらに橋本（1950）は岸田（1942）に言及し、連続する二母音の内どちらが脱落するか

についても一定の決まりがあることに触れ、二重母音との関連性を示唆しながら説明している。この決まりを著者の表現で言い換えれば、次のようになる。

(12) 語境連鎖における母音脱落規則 ((11) と重複する例は省く)

a. 一般規則: $V_i\#[\#V_j]$ において V_i を消去できる。

例: *iheniaru* > *ihenaru* 「家にある」、*himenaoasobi* > *himenasobi* 「姫のあそび」

b. 特殊規則: $V_i\#[\#V_j]$ において、下記の条件で V_j を消去できる。

条件 A: 口腔の開きが V_j より V_i の方が大きい場合

例: *yamanoue* > *yamanoe* 「山の上」、*wagaihe* > *wagahe* 「我が家」、
kotoitasi > *kototasi* 「こと痛し」

又は、条件 B: V_i が後舌母音で V_j が前舌母音の場合

例: *wagaihe* > *wagahe* 「我が家」、*kotoitasi* > *kototasi* 「こと痛し」

ただし、橋本は岸田が提案した条件 B は認めていない。恐らく理由は条件 B の根拠となるべき事例が条件 A でも説明できるためであろう。

実はこの議論と関連する興味深い現日本語の現象に関する提案を著者が行っている。Yoshiba (2005) は現日本語における複数の現象に基づき、田村 (1984, 1992) の「母音ハイエラーキ」の概念を再検討し、母音の高さが同じ場合、前舌母音と後舌母音とどちらが優位かについて議論している。その結果、高母音 *i* と *u* では後者の方がより強い母音であると結論づけている。簡単な例を挙げれば、*/iu/* 「言う」は長母音化・単音節化して *[ju:]* となるが、*/kui/* が **[ki:]* のように長母音化・単音節化することはない。他にもキウリ > キュウリやキウイ > キュウイなどの例がある。従って、岸田の条件 B も通時的に調査をしてみる価値があるのではないと思われる。

次に (11c) の字余りについてであるが、これも古くは本居宣長が指摘したものについて橋本が検討を加えている。この字余りと母音消去の関係について、Miller (1975) は『仏足石歌』を分析し、大半の字余り句には母音連鎖が含まれており、発音上は片方の母音が消去されるため、字余りにはならないと主張している。次節では OCOJ を使って Bussokuseki-ka を改めて分析し、これを検証する。

4.2 『仏足石歌』の字余り句の再分析

奈良薬師寺金堂の裏正面内側の通路に仏足石とともに仏足跡歌碑と呼ばれる石碑が置かれている。これらは 753 年に文屋智努によって作られたが、石碑に刻まれた歌の作者は不明である。アルタイ比較言語学の研究者であったロイ・ミラー氏はこの碑文を自ら拓本に撮るほど熱心に『仏足石歌』の研究を行い、その成果を米国ワシントン大学在職中に学生たちに伝えた。当時大学院生の一人として彼の教えを受けた著者は、OCOJ を利用してこれを再分析し、その結果、以下の事実を確認した。

万葉仮名で刻まれた歌は全部で21首あり、それぞれが5-7-5-7-7-7の形式で統一されている。まずは第1首を例に字余りと母音連鎖の関係を検討してみよう。

(13) OCOJのBS第1首

OCOJ テキスト	原文	原文文字数 (OCOJ 音節数)
mi-ato tukuru	美阿止都久留	<u>6</u> → 5
isi no pibiki pa	伊志乃比鼻伎波	7
ame ni itari	阿米爾伊多利	<u>6</u> → 5
tuti sape yusure	都知佐閑由須礼	7
titipapa ga tame ni	知知波波賀多米爾	<u>8</u>
moropito no tame ni	毛呂比止乃多米爾	<u>8</u>

第1首は(13)に見る通り、6-7-6-7-8-8という文字数で、仏足石体と呼ばれる基本形式から逸脱した1字余りの句が4つもある。最後の2句(8-8)については後ほど検討するとして、ここでは第1句と第3句の字余りについて考える。

第1首にはテキストの下線で示した通り母音連鎖が2ヶ所ある。第1句のiaと第3句のiiであり、前者は形態素境界を、また後者は語境界を挟んだ連鎖で、本論ではいずれも語境母音連鎖に相当する。最後の2句を除けば、第1首の字余り行と母音連鎖は全て互に対応し、Millerの説を裏付けることになる。即ち、第1句のmi-ato tukuruはmato tukuruと詠まれ、また第3句のame ni itariはamenitariと詠まれ、発音上、どちらも字余りではなくなるのである。

同様の分析を残り20首を対象に試みた結果は、第1首の結果も含め、次の通りである。

(14) 第1首～21首の文字数(？=判読不能・困難)

#01 <u>6</u> -7- <u>6</u> -7-8-8	#02 <u>6</u> -7-5-7- <u>8</u> - <u>8</u>	#03 5-7- <u>6</u> -7-7-7
#04 5-8- <u>6</u> -7-7-7	#05 5-7- <u>6</u> -7-7- <u>8</u>	#06 5-7- <u>6</u> -7-8- <u>8</u>
#07 5- <u>8</u> - <u>6</u> -7-7-7	#08 <u>6</u> -7-5-7-7-7	#09 <u>6</u> - <u>8</u> -5-7-7-7
#10 5-7-5-7-7-7	#11 5-?-?-?-?-?	#12 5-7-5-7-7- <u>8</u>
#13 5-7- <u>6</u> -7-7-7	#14 <u>6</u> - <u>8</u> -5-7-7-7	#15 5-7-5-7-7-7
#16 <u>6</u> -7-5-7-7- <u>8</u>	#17 <u>6</u> -7-5-7-7-7	#18 5-7-5-7-7-7
#19 5-7-5-7-7-7	#20 5-7-5-7-7-7	#21 5-7-5-7-7-8

碑文は一部が破損または不鮮明になっており、文字及び文字数が確認できる句数は全部で121句になる。その内、字余りと母音連鎖の両方を含むものが24句もあるのに対し、字余りのみで母音連鎖を含まないものは僅かに4句しかない。即ち、発音上の真の字余りと見なされるものは極僅かであると判断することができる。また、母音連鎖を含まない4句について見てみると、第1首の第5句と第6句の8文字、第4首の第2句の8文字、そして第21首の第6句の8文字であり、全てが規定の5文字ではなく7文字の句に限られている。この

事実は和歌の韻律構造と関係が深い4拍子のリズムを想定して見ると、実に整合性の高い内容であると考えることができる。Yoshiba (2001)においても論じたが、七五調の詩において、7拍の句を8拍にしても、句末の休符がなくなるだけで、句全体のリズムを乱すことにはつながらず。つまり、以上の考察の結果、『仏足石歌』は音韻的に非常に均整のとれた朗詠しやすい歌であると言うことができる。

次節に移る前に、第4首の意味解釈について簡単に述べておきたい。OCOJとMiller (1975)の間で、この首の初めの2句の分け方に次ような相違がある。

(15) 第4首の各区の音節数

a. OCOJ: 5-8-6-7-7-7

b. Miller: 6-7-6-7-7-7

OCOJは従来からの解釈に基づき、第4首を次のように表記している。

(16) OCOJの表記・解釈

ko no mi-ato 「この御跡」
ya-yorodu-pikari wo 「八万光を」
panati-idasi
moromoro sukupi
watasi-tamapana
sukupi-tamapana

(16)では、第1句が母音連鎖を含む5文字句、第2句が母音連鎖を含まない8文字の字余り句、そして第3句が母音連鎖を含む6文字の字余り句である。勿論、第3句は母音消去を適用することにより、発音上は5音節であり、字余りは解消するが、第2句の字余りは解消しない。

これに対し、Miller (1975)では、この首に新しい解釈を採用し、次のように表記している。

(17) Millerによる表記・解釈

könö miatö ya 「この御跡や」
yörödu Figari wo 「万光を」
Fanati idasi
morömorö sukuFi
watasi tamaFana
sukuFi tamaFana

(17)では、従来の解釈による「八万」の八を、感動詞「や」とし、第1句の句末に配している。その理由は明らかに、発音上の拍数を整えることを優先するためである。つまり、この新しい解釈の採用により、母音連鎖を含む第1句に母音消去が適用されて字余りが解消す

ると同時に、OCOJでは字余り解消ができなかった第2句も、字余りではない7文字句になるのである。この解釈の正否については異論もあろうが、このMillerの分析について著者が重要視するのは、一般に詩などの解釈に曖昧性が生じた場合、それを音韻論的な分析により解決できる可能性があると言うことを彼が明示した点である。

4.3『万葉集』における字余りと母音連鎖

『万葉集』については広く知られているので、ここで改めてその成り立ちを説明することは省くが、前節で観察した『仏足石歌』における字余りと母音連鎖の関係は、元々は『万葉集』の研究によって明らかになったものである。従って、今後、字余り及び母音消去の検索が簡単にできるようなコーパス分析の手法と、さらにはコーパス自体の改良を進めることが記紀歌謡全体の綿密な分析のためにぜひとも必要である。本節では、その手がかりとして、予備的知識を得るために行った限られた量の分析結果を報告する。以下の記述で使用する資料は、3.1で示したMan'yōshūに現れる語中母音連鎖を含む語(56例)が使われている歌(54首)である。この資料を対象に、(A)語中母音連鎖と字余りの関係、と(B)語境母音連鎖と字余りの関係、についてそれぞれ簡単に報告したい。

最初に、語中母音連鎖を含む56例と関連すると思われる字余りがいくつあるかを数えてみた。その結果は僅かに次の9例である。

(18) 語中母音連鎖を含む字余り句(斜体字は語中母音連鎖、下線部は語境母音連鎖、

また括弧内 $m+n$ において、 m は本来の拍数、 n は余り字数)

- 1) 3.371 *ou no umi no* (5+1)
- 2) 4.536 *ou no umi no* (5+1)
- 3) 4.674 *kui ni pa ari to ipe* (7+2)
- 4) 5.897 *oi-nite aru* (5+1)
- 5) 7.1218 *kurwousi no umi* (5+2)
- 6) 11.2502 *asanaasana* (5+1)
- 7) 11.2784 *karaawi no pana no* (7+1)
- 8) 15.3746 *pito no uru* (5+1)
- 9) 18.4057a *kimi ga kuite ipu* (7+1)

(18)を見て気付くことは、6)と7)の2例を除いた7例すべてにおいて、語中連鎖だけでなく、語境連鎖も同時に存在している点である。また、3.2で議論したように、*kurwousi*、*asanaasana*、及び*karaawi*はいずれも合成語又は反復語であるから、形態構造は $[\#kurwo\#\#usi\#]$ 、 $[\#asana\#\#asana\#]$ 、 $[\#kara\#\#awi\#]$ と考えられる。そうすると、5)～7)にはそれぞれ一つずつ語境連鎖が加わることとなり、その結果、9例すべてにおいて余り字の数と等しい数の語境母音連鎖が存在することになる。以上の検討結果から、『万葉

集』における字余りと母音連鎖の関係を次のようにまとめることができる。

(19) 字余りと母音連鎖の関係

a. 字余り句の多くは語境母音連鎖を含んでおり、その拍数は母音消去規則の適用により基本韻律である七五調に整えられる。

b. 語中母音連鎖にも a と同様の役割を果たす可能性はあるが、その数が極めて少なく、そのために母音消去規則の適用を受けて拍数の調整に関与することも稀である。

また、この特性は『仏足石歌』にも同様に見られることから、記紀歌謡全体に当てはまるものと考えて良いと思われる。

次に、引き続き語境母音連鎖と字余りの関係についてより詳しく検討してみたい。まず、語境母音連鎖がどの程度の頻度で出現するかであるが、その予備的な調査として、今回は 3.1 で使用した 54 首の全ての句についてさらに調査をした。結果は (20) の通りである。

(20) 54 首中の語境母音連鎖を含む字余り句 ((18) の 10 例は除く)

- 1) 3.475 wa go opo kimi (5 + 1)
- 2) 4.559 ware-pa ap-yeru kamo (7 + 1)
- 3) 4.674 koto pa ipedo (5 + 1)
- 4) 5.897 upani utu to (5 + 1)
- 5) 5.897 sinana to omopedo (7 + 1)
- 6) 5.897 mitutu areba (5 + 1)
- 7) 6.1034 wodu to ipu midu so (7 + 1)
- 8) 6.1034 na ni opu taki no se (7 + 1)
- 9) 7.1287 pito mo apa-nu kamo (7 + 1)
- 10) 7.1349 sinwo ni ara-naku ni (7 + 1)
- 11) 8.1520a aki ni ara-zu tomo (7 + 1)
- 12) 9.1740 api-atorapi (5 + 1)
- 13) 9.1740 ipye yu idete (5 + 1)
- 14) 9.1740 mi-tose no api da ni (7 + 1)
- 15) 9.1740 waka-ku ari-si (5 + 1)
- 16) 9.1740 kurwo-ku ari-si (5 + 1)
- 17) 11.2386 kwopwi to ipu koto pa (7 + 1)
- 18) 11.2784 iro-ni ide-me ya mo (7 + 1)
- 19) 12.2947b kadwo ni idete (5 + 1)
- 20) 15.3746 are pa ika ni se-mu (7 + 1)
- 21) 16.3851 okite araba (5 + 1)
- 22) 17.3962 kokoro puri-okosi (7 + 1)

- 23) 17.3993 tuyurupi ara-me ya (7 + 1)
- 24) 18.4125 kokoro pa ara-mu wo (7 + 1)
- 25) 18.4125 aki ni si ara-neba (7 + 1)
- 26) 19.4187 puse no umi ni (5 + 1)
- 27) 19.4187 wopu no ura ni (5 + 1)
- 28) 19.4187 ko no puse no umi wo (7 + 1)
- 29) 19.4214 tune na-ku ari-kyeri (7 + 1)
- 30) 19.4214 toki si pa ara-mu wo (7 + 1)
- 31) 19.4220 a ga kwo ni pa aredo (7 + 1)
- 32) 19.4220 kedasi ape-mu kamo (7 + 1)
- 33) 20.4449 kimi ni mo aru kamo (7 + 1)

(20) に見るように、語中母音連鎖を含むと思われた 54 首について、さらに精査したところ、他の句で新たに 33 例の語境母音連鎖が発見され、その全てが 1 字余りの句であった。これを (19) で検証した 11 例と合わせると、驚くことに、別の目的で検索した 54 首の歌の中に 44 例もの語境母音連鎖が含まれており、さらには各句において同数の余り字が存在することが判明したのである。

本章における『仏足石歌』と『万葉集』の調査により、(19) で提示した母音連鎖と字余りの関係は広く記紀歌謡全体並びに古日本語の主要な特質の一つであることが検証できたのではないだろうか。

5. まとめ

今回の調査では、語中母音連鎖については OCOJ 全体を、また語境母音連鎖については *Bussokukeki-ka* 及び *Man'yōshū* の全体を検索したが、それらを用いた語境母音連鎖と字余り句の関係についての詳しい分析は *Bussokukeki-ka* については全体に及んだものの、*Man'yōshū* に関しては全体の約 1 パーセントに止まった。後者については、今後さらに検索手法を検討し、4,500 首以上の膨大な資料全体を網羅する分析方法を確立することが必要であるが、本稿での限られた資料の分析ではあっても、今後の研究に向けて記紀歌謡における母音連鎖と字余り句の特徴及び両者の関係を予測するに足りうる分析結果が出たと思う。又同時に、古日本語の音節構造が理想に近い CV 言語の特徴を備えていることもある程度立証できたのではないだろうか。

最後に、2014 年から 2015 年にかけての在外研究中にオックスフォード大学東洋研究学部にて客員教授として受け入れてくれたビヤーク・フレレスヴィック教授と同大学日本語研究

所において「オックスフォード上代日本語コーパス」の利用を可能にしてくれた協力者ケリー・ラッセル研究員に深い感謝の意を表して本稿を閉じたい。

参考文献

- Frellesvig, Bjarke (2010) *A History of the Japanese Language*. Cambridge University Press
- Frellesvig, Bjarke (2015) Why romanize a corpus of (Old) Japanese? 近藤, 他 (編)『コーパスと日本語史研究』ひつじ書房
- Frellesvig, Bjarke & John Whitman, eds. (2008) *Proto-Japanese: Issues and Prospects*. CILT 294
- 橋本進吉 (1917)「国語仮名遣研究史の一発見—石塚龍麿の仮名遣奥山路について—」『帝国文学』23-11. 岩波書店 (『文字及び仮名遣の研究』橋本進吉博士著作集 3, 1949. 岩波書店に再出)
- 橋本進吉 (1938)「国語音韻の変遷」『国語と国文学』15-10. (『国語音韻の研究』橋本進吉博士著作集 4, 1950. 岩波書店に再出)
- 橋本進吉 (1942)「国語音節構造と母音の特性」『国語と国文学』19-2. (『国語音韻の研究』橋本進吉博士著作集 4, 1950. 岩波書店に再出)
- 橋本進吉 (1950)「国語の音節構造の特質について」『国語音韻の研究』橋本進吉博士著作集 4, 1950. 岩波書店 (雑誌『国語学』創刊号 (国語学会編) のために執筆、未出版?)
- Horn, Stephen Wright & Kerri L. Russell (2015) *The Oxford Corpus of Old Japanese*. 近藤, 他 (編)『コーパスと日本語史研究』ひつじ書房
- 石塚龍麿 (1798)『仮名遣奥山路』(竹部歩美翻刻「石塚龍麿『仮名遣奥山路』上・東大蔵橋本進吉写本 (翻刻)」『新國學』復刊 5 号、國學院大學院友學術振興会、2013 年)
- 岸田武夫 (1942)「上古の国語に於ける母音音節の脱落」『国語と国文学』19
- 近藤康弘・田中牧郎・小木曾智信 (編) (2015)『コーパスと日本語史研究』(ひつじ研究叢書<言語編> 第 127 巻) ひつじ書房
- Martin, Samuel E. (1987) *The Japanese language through time*. New Haven: Yale University Press
- Miller, A. Roy (1967) *The Japanese Language*. Chicago: University of Chicago Press
- Miller, A. Roy (1975) "*The Footprints of the Buddha*": an eight-century old Japanese poetic sequence. American oriental series, v.58. New Haven: American Oriental Society.
- Miyake, Marc H. (2003) *Old Japanese: a phenetic reconstruction*. London: RoutledgeCurzon
- 村田忠男 (1984)「人工オノマトベによる日本語音声ハイエラキ」『言語研究』86:68-90
- 村田忠男 (1992)「音声ハイエラキ、音節およびモーラ」文部省重点領域研究成果報告書『日本語のモーラと音節構造に関する総合研究 (1)』8-25
- 大野 晋・佐竹昭広・前田金五郎 (編) (1990)『岩波古語辞典補訂版』岩波書店
- Yoshida, Hiroshi (1983). *Moric Phonology: Toward the Establishment of the New Phonological Unit*. Ph.D. dissertation. University of Washington
- 吉波 弘 (2001)。「七五調のリズムは「優律動的」か?」『紀要』42.93-102. 青山学院大学文学部
- 吉波 弘 (2005)。「日本語における母音素性の有標性とアクセントシフト」『音韻研究』8.113-120. 開拓社